



戦争体験者への聞き取りを終え、千代田区長に感想を伝えるインタビューーたち

## 第4部

# 千代田区の 誓い

# 心をつなぎ、平和を語り継ぐ志を次の世代へ

戦後70年を迎えるにあたり、新たに編まれることになった『千代田区戦争体験記録集』。インタビューアールとして16名の若者が区内の戦争体験者の皆さんへ聞き取りを行いました。夏休み期間中の取材を通して感じたこと、平和への思いを、千代田区長・石川雅己との対談を通じて語ってもらいました。



千代田区長  
石川 雅己



安田 律子  
大学院 2年生



長嶋 泰  
大学 1年生



横山 嶺州多  
中学 3年生



三輪田 颯真  
中学 1年生

## 戦争を体験した方々のお話を聞いて

**石川** 皆さん、『千代田区戦争体験記録集』のインタビューではお疲れさまでした。先ほど映像（取材の様子を記録したダイジェスト映像）を見ましたが、素晴らしい出来映えでしたね。初めての経験だったと思うけれど、大したものだと感じしました。

**安田** ありがとうございます。

**石川** 事前に、いろいろと調べたり勉強もしたのでしょね。

**横山** 戦争にまつわる年表や空襲の被害を受けた地区の地図などは、おおまかに調べて行

きました。徴兵制ちようへいせいについては、授業で学んだことが役に立ったと思います。あと今年の夏は戦後70年の記念番組や報道も多かったのだ、それも参考になりました。

**三輪田** 事前にインタビューをする方のプロフィールをもらっていたので、僕はそのなかで知らない言葉や地名を調べたり、親に聞いたりしました。

**石川** 知らない言葉というの？

**三輪田** たとえば、「巢鴨ブリズン」です。僕がインタビューをした広瀬儀光さんが戦後に働いていたというのですが、こういった施設なのかよく分からなくて。

**安田** 私と長嶋さんの班は、ビルマ戦線で従軍された永井孝之さんのインタビューを担当しました。インパール作戦のお話が出るのではと思って、その辺りの地図などを用意して行ったのがとても役立ちました。

**長嶋** 永井さんは耳が遠いようでしたが、記憶ははっきりされていて。実際に体験した方ができないと分からないお話をたくさん聞くことができました。

**石川** それは貴重な体験でしたね。

**長嶋** 耳が悪くなったきっかけというのも、戦地で跳弾ちようだんを耳の近くで受けたからと聞き、「ああ、この人は本当に戦争を経験したのだ



な」と強く印象を受けました。

**石川** 千代田区では、平成7年度から平和教育の一環として区内の中学生・高校生に広島・長崎、沖縄を訪れてもらっています。

**横山** はい、僕も昨年度に行きました。

**安田** 私も九段（中等教育学校）へ通っているときに参加しています。

**石川** その時にも、参加する生徒さんには事前に勉強会などを開いて、広島・長崎の原爆、沖縄戦について調べてもらいます。ただ帰ってきてから話を聞くと、ほとんど全員が「教科書や映画で知ったことと、ぜんぜん違う」と言います。それは現地で、実際に経験した方のお話を聞いてくるからなんですね。

**横山** 戦争というと悲惨な話ばかりだから、体験者の方も思い出したくないだろう。だから記憶にも残っていないのではと想像していました。でも実際にお会いしてみると、皆さんすごく細かいところまでリアルに覚えていて、びっくりしました。

**石川** それだけ、強烈な体験だったということでしょう。

**三輪田** 悲しい記憶ばかりではなく、戦前戦中にあった、楽しい思い出などを語ってくれる人もいたことが、僕は印象に残っています。

**長嶋** 空襲の最中に、家財道具が火にあおられて離れて行ってしまふ様子を「リヤカーが散歩にいらしてしまふ」と表現された人がいました。そんな大変な状況を、ユーモアを交え

て話してしまうことも、なんだかたくましいなあと思いました。

**安田** 私は、千代田区に生まれ育った人同士でお話できたことが、非常に良かったと感じています。この町内に住んでいたけれども空襲に遭って、どこまで逃げたといった体験を聞くと、「この道を通ったのだろうか」と順路や距離感までぱっと思い浮かぶからです。

**長嶋** 「麹町から坂の上を見上げたら、水道橋駅のホームがまるみえだった」と聞くと、あの一帯がすべて焦土と化したのか：と。

**石川** 戦争があった、その現場に立つというのは、非常に大切なことですね。

**三輪田** 僕たちの班がインタビューをした福地貞子さんは、麹町にB29が墜落した時のお話をしてくれました。取材後、その交差点まで案内してもらって、B29の機体がどこからどこまであったかを聞いて。とても大きな飛行機だったことが実感できました。

**安田** 本当に変な話やお話やその時の気持ちなどを聞くと「実際に体験したことのない人に、本当のところを伝えるのは難しいと思う」という言葉も、いろいろな方から聞きましたね。

**長嶋** 特に従軍した永井さんの、「戦争は、行ったことがない人間には分からないよ」という言葉は、ずしんと心に響きました。

**石川** 永井さんはきっと、目の前で仲間が

次々と亡くなっていくような体験をなさっているはずで。どんなに悲しく悔しい思いだったかは、皆さんたち若者でなくても、なかなか伝えられるものではない。そのことも含めて、貴重な体験でしたね。

**長嶋** はい、そう思います。

### 家族をつなぐ、絆の強さ

**石川** 他には、どんなお話が印象に残っていますか。

**長嶋** これも永井さんのお話なのですが、一度任期満了で軍役を解かれたとき、「このまま留まれば一階級昇進が可能だ」と言われたけれど、それを断って帰ってきたそうです。その理由が、家族に会いたかったからだ。



**安田** それでいて、戦争が終わってすぐに日本へ連絡をしたかというところ、しなかった。「死んだという知らせは公報で行くだろうから、知らせがないなら、生きていると信じてくれるだろう」という

答えでした。

**長嶋** まったく違う話のようですね、家族の絆の強さというか、お互いを思い合う気持ちの強さを感じました。

**石川** ご家族と離れて戦地に向かうのは、本当に辛かったですよね。

**安田** 残された家族のもとへ戦死の知らせが届いたときの様子や、そのときの悲しかった気持ちも、いろいろな方からお聞きしました。

**三輪田** 座談会でお話を聞いた櫻井守さんは、お父さんが戦死されています。今の自分よりももっと小さい小学生だったというから、本当に大変だっただろうし、悲しかったです。

**石川** 困難な時代を、家族で助け合って生き抜いたという体験も多かったのではないですか。

**安田** 神田でお風呂屋さんをなさっていた富川昭枝さんのお話が、印象に残っています。自宅が空襲に遭ったとき、お母さんだけは「店を守る」といって1人で残ったそうです。これは私の推測にすぎませんが、富川家では次男の方が徴兵されていて、そのお兄さんが帰ってくる家を守りたかったのかなと思っただけです。

**長嶋** 逆にお父さんの方は、「戦争でばらばらになった家族が帰ってきたときのために、家がないと困るだろう」と言っていて、お母さんの大反対を押し切って隣の町のお風呂屋さん

買い取るんですよ。

**石川** どちら

も、子供を思う親心のあらわれ

だと感じられるお話です。家族のために食べ

物を用意するご苦労について、お話しされる方も多かったのではないですか。

**横山** 僕がインタビューした角田実さんは、15歳のときに清瀬市の方までサツマイモを買に行った話をしていました。やっとたどりついた農家で次々と「もうないです」と断られ、どんどん奥の方まで歩いて行って、最後は「子供だからかわいそうだ」と譲ってもらえたということでした。

**長嶋** 着物と交換でやっと手に入れた食料を、駅で見つけて没収されるという話は、理不尽だと思いました。それで駅に着く前に窓から放り出して、それを別な人が回収するようにになったなど、みんな知恵をしばって生き延びたんだろうな。

**石川** 戦後に、お堀の鯉を釣って食べたというお話もあったとか。

**長嶋** 日比谷公園に農園があったという話も面白かったです。千代田区でも、農業や漁業



が行われていたんですね(笑)。

**安田** 庭をつぶして野菜を作ったというお話も聞きました。でも空襲後の焼け跡の土では、うまく野菜が育たなかったそうです。

**石川** その話で思い出したけれど、私も父親を手伝って庭で野菜を作っていたんですよ。でも全然、うまくいかなくてね。だからガーデンニングや家庭菜園が流行っても、僕はまったくやりたいと思わない(笑)。

**長嶋** 当時、サツマイモやカボチャばかり食べさせられたから、「もう見るのも嫌だ」という人も多いですね。

**横山** インタビューした人ではないのですが、僕の祖父は「戦争中にサツマイモで救われたから」といって戦後もサツマイモが好物でした。

**石川** 戦争体験といっても、ひとくくりにはできないことが分かりますね。

**長嶋** 疎開先でも、福島や新潟に行った人は「食べ物に不自由しなかった」と言うけれど、長野では「すごく苦労した」と言う人もいて、地方によっても違うんだなと。

**石川** 親戚の家へ疎開する縁故疎開と、学校ぐるみで疎開する学童疎開では、また事情が違ったのでは？

**安田** 地方には食べ物が豊富にあっても、同じ時期に、東京では食料がまったく手に入らなかった。なぜだろうと考えると、流通手段は遮断されているし、運ぶための燃料も足り

なかったのだと気がつきました。

**石川** 食料はあっても、運ぶ手段がなかったということでしょう。

**安田** たとえば大地震のような自然災害でも、同じような状態になる可能性はあります。そう考えると、食糧難というのは決して人ごとではないのだと思っただけです。

**石川** なるほど。戦争という非常事態を通じて、都市の生活を考えると、視点は非常に鋭いと思いますよ。

**長嶋** 疎開先の鎌倉で「毎日ブリが出た」と言っていた方もいました。水揚げされても新鮮なまま運べないから、地元で安く売るしかなかったのだらうというお話でした。

**石川** 「毎日ブリ」といったら、今ではぜいたくと言われそうです(笑)。何がぜいたくで、何がぜいたくでなかったのか。戦争中の出来事を現在の価値観で考えると、誤解が生じて

しまうこともあるかもしれませんね。

### 次の世代へ語り継ぐことの意味

**石川** 戦争当時、皆さんと同じ年頃だったという方のお話を聞く機会もあったでしょう。たとえば中学生や高校生だったら、勤労動員で武器を作る。女子学生も挺身隊で働く。あなたもその立ち場になったら、どうすると思いますか。

**横山** 僕は逃げ出すと思います。  
**三輪田** そのときになってみると、分かりません。

**安田** 私はたぶん、嫌だと思いつつも最終的には行くんじゃないかと思えます。

**長嶋** 当時の状況としては、行かざるをえないんじゃないか。拒否したら、自分だけじゃなく家族も非国民扱いでしょうから。

**石川** 4人それぞれに意見が違うというのが、面白いですね。

**長嶋** 僕がインタビューを通じて非常に考えさせられたのは、教育が人に与える影響の大きさです。戦争体験者といっても、年齢によって戦前の教育を受けた人と、戦後の教育を受けた人ではまったく価値観が違う。特に戦争責任や戦後処理について、考え方が根本的に違うような気がしました。だから教育って、すごく大切でもあるし、怖いものでもあるんだなと思っただけです。





**安田** 教育ということで私がすごく印象的だったのは、小学校1・2年のときに終戦を迎えられた小林東太郎さんが、「翌日から先生の言っていることがぜんぜん違うというのが、すごく衝撃的だった」と語っていたことです。その体験をきっかけに、少なからず人間不信に陥ったとまでおっしゃっていました。

**石川** それまで使っていた教科書に、墨を塗ったのですからね。それは衝撃的だったでしょう。

**横山** 価値観というところ少し違うかもしれないのですが、インタビューした角田実さんのお話が印象に残っています。当時は道端にたく

さんの防空壕が掘られていたそうです。角田さんは、空襲の時にそこへ逃げ込んだ人が亡くなったのを見てしまったそうです。

**長嶋** 防空壕に入ったがために、逆に命を落とした話はけっこうありましたね。

**安田** 空襲のときに「軍の近くに逃げれば安全だろう」と思ったなら、逆だったという話もありました。よくよく考えれば、敵機は軍の施設をめぐって爆撃するのだから狙われて当然なのでしょうけれど。

**横山** 結局はその場その場で、自分の判断がいちばん大事なんだと僕は思いました。

**石川** インタビューを通じて、皆さんがいろいろな視点から物事を考えてくれたことを嬉しく思います。体験者の方々も、若い皆さんと話ができて嬉しかったのではないのでしょうか。

**三輪田** インタビューの最後に、「お話しできてよかった」と言ってくくださる方が多かったです。

**安田** 熱のこもったお話からも、「今ここで話しておかなければ」という、強い思いが伝わってきました。

**石川** あらためて、今回の経験を通じた皆さんの感想を教えてくださいませんか。

**三輪田** 全部で5人の方にインタビューをしたんですけど、どの人も「戦争はやめたほうがいい」ということを繰り返していました。本当に戦争は何もいいことがないんだってこ



とを、改めて知ることができまし、今の平和の大切さを知ることができました。

**横山** 僕は、継承していくことの大切さを感じました。こういう活動をしていると、「珍しい」と学校の友達にも言われてしまう。でも海外だと、中高生でも自分たちで戦争体験者の話を聞く活動を行っていると聞きます。今回インタビューに参加して、実際に話を聞くことで、文章や数字だけでは分からない、多くのことが学べると実感できました。

**長嶋** 今回初めて戦争体験を語ったという人に、「なぜこれまで話さなかったのですか?」と聞いたら、「誰にも聞かれなかったからだ」と言われてドキッとしました。確かに僕たち後の世代の人間が積極的に聞いていかなければ、継承されない体験もきっと多いのだと思

います。

**安田** 私は、ご近所関係の大切さをあらためて考えさせられました。空襲で何もかも焼けてしまったけれど、バラックで何とか店を再開したら、お客さんが戻ってきてくれたばかりでなく、「元どおりに開いてくれてありがとう」と感謝された。人と人のつながりって、いいものだなあと思いました。

**石川** 皆さんの世代は、メールなど直接に顔を合わせないコミュニケーションが当たり前になっていますよね。ですから今回のインタビューのように、面と向かって誰かとじっくり話をする体験はなかなか少ないのではないですか。

**横山** そうですね。今回も、グループ内での事前の打ち合わせはほとんどがメールでした。取材の日に初めて顔を合わせたという人が、何人もいました。

**石川** そうした皆さんにとっても、「自分たちの体験を伝えたい」という思いを持った体験者の方とお話しする機会は、とても貴重な心と心のつながりになると思います。

**横山** 「自分たちの志を伝えてほしい。体験を次の世代に伝える担い手になってほしい」とおっしゃる方もいました。そのためにも、辛かったとか悲しかったという感情だけでなく、こういうことが実際にあったのだという事実をしっかりとお話しくださったのではないかと思います。

**石川** 戦後70年の間に、日本は平和な社会を保っています。戦争体験者の方々は、戦争で命を落とした多くの人の命のうえに、その平和が築かれていることをご存じです。だからこそ、若いインタビュアーの皆さんに「自分たちの思いを分かち合いたい」「事実を伝えたい」という気持ちが強いのだと思います。たくさんお話ししてくださる方が、多かったのではないのでしょうか。

**安田** 私たちもつい引きこまれて、予定の時間を過ぎてしまうこともありました。

**石川** 前回（平成9年）に『語りつぐ平和への願い（千代田区戦争体験記録集）』を作ったときは、インタビュアーに若い人を選ぶことはしていなかったのです。

**長嶋** そうだったんですね。少し意外な気がします。

**石川** しかし戦後70年の今回は、皆さんのような次の世代を担う人たちにぜひ、お願いしたかった。「顔を合わせて話を聞く」という体験は、やはり心に残ります。教科書や資料からは得られない学びがあるはず。次の時代や社会を築いていく若い皆さんが、平和の尊さや、戦争はどういうものかということも少しでも分かかって、未来にわたって平和な社会を築いてもらいたい。戦争は最終的に、人間が決めることですからね。

**横山** はい。

**石川** それには経験者の話を聞いたり、千代

田区の平和教育のように現地へ行った経験を心に刻むことが大切です。そうして自分たちなりに感じたこと、考えたことを友達や家族、できれば年下の後輩たちにも伝えてほしい。この先結婚して、お子さんや孫が出来たときにも、「昔こんな人に会ってね」と話してもらいたいのですよ。

**全員**（笑）。

**石川** 今回もそういう気持ちでお願いしました。あらためて、大変な経験とご苦労を経たことに感謝します。ありがとうございました。



